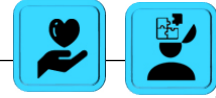


23 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のために 教材研究  
鑑賞の題材に演奏体験を位置付け、生徒の「聴く力」を深める



**こんな実践**

鑑賞の授業において、作曲者の境遇や作曲された当時の時代背景などは、教師から生徒への一方向的な伝達となってしまうことが多い。このことから、「作曲当時の作曲者自身の境遇」と実際の音楽とのかかわりとを結びつけられるように演奏体験を取り入れ、生徒が楽曲の特徴とかかわらせて聴き深めていくことができるようにした鑑賞の授業の実践。

題材名 題材名「作曲者の心情と音楽の要素とを結びつけて鑑賞しよう」

実践学年 2学年

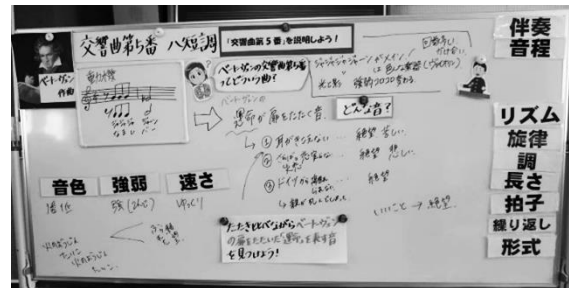
実践時期 11月中旬

学校名 A中学校

学習指導要領との関連：B表現 ア及びイ

○ ベートーヴェンの作曲時の心情や背景を表す動機にふさわしい音探しを位置付ける

先生は、ベートーヴェン自身が「運命が扉をたたく音」とした「動機」に着目して、交響曲第5番と作曲者の境遇や背景とをかかわらせて鑑賞できるようにしたいと考えました。そこで、ベートーヴェンの境遇を資料で確認した後、音色、強弱、速さに着目して、絶望感や苦しい気持ちなどがどのような音色によって表されるかを、実際の楽器の音色や奏法から探す活動を位置付けました。生徒は、多様な楽器で試しながら、発した音に対して友と会話したり、一人でうなずいたりしながら、自分なりのふさわしい音色を選んでいく姿が見られました。



生徒の考えを板書に集約し、共有する

このような活動の後、再度楽曲を鑑賞した際には、楽曲の動機に反応して表情を変えたり、動機に反応して体を動かしたりするなど、様々に変化する「動機」を楽曲から捉えながら聴き深めることができていました。



「どの楽器の音が心情に合うだろう」



**ここがポイント！**

- ・実際の音で心情や背景を表す音色があることを、体験的な演奏活動を通して着目できるようにすることが大切です。

題材の終末の授業では、これまで学習してきたことをまとめる活動として、批評文を書く活動を位置付けました。そこでは、ベートーヴェン自信になりきって、この曲をこれから演奏するオーケストラ団員に対して、どのように演奏してほしいかをメッセージとして届けるという設定のもとで行われました。

生徒は、「動機」が演奏される楽器の音色によって変化する雰囲気の変化や、多様な楽器が関わり合うことによって生まれる迫力（強弱）などを、ベートーヴェンの境遇や心情などとかかわらせながら書く姿が見られました。メッセージ文1を書いた生徒は、ベートーヴェン自身が自らの境遇から感じ取っている失望感を表す動機、時間がたつにつれて失望感が強まっていくような「動機」の強弱の変化、当時ベートーヴェンのピアノを教えていたジュリエッタに対する感情を表しているかのような優しく穏やかな雰囲気への変化などを捉えることができている。これは、前時に「動機」を音色や強弱などを視点に実際に演奏した体験をしたことで、楽曲から聞こえてくる「動機」の連なり方や重なり方を聴く力が高まっていたことで、楽曲をより深くとらえることができるようになっていった姿であると考えられます。

また、このメッセージ文の内容には、楽曲の形式である「ソナタ形式」の特徴である、「動機」「第一主題・第二主題の特徴」等に触れる内容でもあり、生徒が楽曲の形式について学習をすることに発展できる内容も含まれています。

団員へ

この曲は、私の親が死んでしまったり、失恋したり耳が聞こえなくなったりと、私の失望をジジジジーンで表しているんだ。この動機は後半にいくにつれて、強く強く演奏してほしい。途中で優しく弱く、ゆくり演奏してほしい。

本番一緒に頑張ろう!

by ベートーヴェン

メッセージ文1：作曲者になりきって、団員に対するメッセージを書く



### ここがポイント!

- ・批評文を、体験的に演奏することで得た知識を活用して記述することができるような題材終末の活動を位置付け、学習で得た内容を自分でまとめられるようにしていくことが大切です。

### まとめ

楽曲の特徴とベートーヴェンの作曲時の背景とを重ね合わせて考えられるようにしたことで、楽曲に対する評価とその根拠を明らかにして鑑賞できる資質・能力の高まりがみられました。